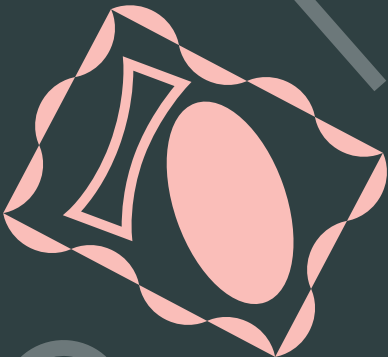


アール・ブリュット2025巡回展



既知との遭遇

Encounter with the Known



welcome to the world of autobiographical bricolage!

自伝的
ブリコラージュの
世界へようこそ！

Art Brut 2025
Touring Exhibition



アール・ブリュット2025巡回展

既知との遭遇

自伝的
ブリコラージュ
の世界へようこそ!

Art Brut 2025 Touring Exhibition Encounter with the Known
welcome to the world of autobiographical bricolage!

ごあいさつ

この度、東京都と東京都渋谷公園通りギャラリーは、アール・ブリュット*2025巡回展「既知との遭遇 自伝的ブリコラージュの世界へようこそ！」を開催いたします。本展では、獨創性あふれる表現方法により近年国内外で活躍する6名の作家を、都内3か所に巡回して紹介します。「ブリコラージュ」とは、あらかじめ定められた完成形を目指すのではなく、手元にある素材や道具を即興的かつ柔軟に用いて、ありあわせのものを組み合わせることで、従来のものの用途や役割を離れ、備えられた機能を超えて、新たな意味を獲得しようとする創作や思考方法のあり方を表します。本展では、私たちの身近に存在する素材やモチーフを用いながら、新たなかたちを再構築する作家たちの創造に注目します。それらは、一見既知のものでありながら、作り手の感性と機知によって、見たこともない奇知の創造物となるのです。

毎日コピー機で刷られる不思議なポートレート写真や、広告チラシを切り貼りした高密度なコラージュは、複製技術の解体と再生の物語を紡ぎます。また、膨大な量の箸が重なり合う構造物や糸がぐるぐる巻きにされた立体物からは、繰り返される作り手の行為と時間の集積が感じられます。さらに、ペンのインクを染み込ませてできる無数の赤い円やパステルを厚く塗りこんだ大胆な構図の絵といった、具象と抽象のイメージが交差する表現からは、素材と戯れるかのように創作する作り手における機微な観察のまなざしをうかがうことができるでしょう。本展で紹介する作品との遭遇によって、日常に埋もれがちな「既知」との新たな出会いの機会となり、あらためて身のまわりの世界が見つめ直されるきっかけとなれば幸いです。

最後になりますが、本展開催にあたり、貴重な作品をご出展いただきました作家の皆さま、多大なご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

2025年9月
主催者

本カタログは、下記の通り実施した展覧会の記録である。
This catalog is a record of the exhibition listed below.

第1会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
2025年9月27日(土)ー12月21日(日)

第2会場 プリモホールゆとろぎ(羽村市生涯学習センター)展示室
2026年1月15日(木)ー1月25日(日)

第3会場 板橋区立成増アートギャラリー
2026年1月31日(土)ー2月9日(月)

出張イベント
会場:八丈町多目的ホールおじゃれ
2025年12月6日(土)

主催 東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー
(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館)
協力 羽村市、八丈町教育委員会
後援 板橋区

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery
Sep.27(Sat.) – Dec.21(Sun.), 2025

Hamura City Lifelong Learning Center Primo Hall YUTOROGI
Jan.15(Thu.) – Jan.25(Sun.), 2026

Narimasu Art Gallery
Jan.31(Sat.) – Feb.9(Mon.), 2026

Hachijo-machi Multipurpose Hall Ojare
Dec.6(Sat.), 2025

Organizer:Tokyo Metropolitan Government,
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery
(Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Cooperated by:Hamura City, Hachijo Town Board of Education
Supported by:Itabashi City

*アール・ブリュット(Art Brut)とは、元々、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによって提唱されたことばです。今日では、広く、専門的な美術の教育を受けていない人などによる、独自の発想や表現方法が注目されるアートを表します。

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りました下記の関係者の皆様をはじめ、お名前を記すことのできなかった多くの皆様に、心よりお礼申し上げます。
(順不同／敬称略)

井口直人
嶋暎子
舛次崇
武田拓
鶴川弘二
納田裕加

水上明彦
嶋裕子
三栖香織
神田浩平
辻友子
矢口哲也
室本早知
小田郁代
山岡弘恵
渡邊早葉

社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園
社会福祉法人一羊会 すずかけ絵画クラブ
社会福祉法人ほのぼの会 わたしの会社
社会福祉法人明桜会 生活介護事業所 すたじおぼっち
社会福祉法人みぬま福祉会 工房集

羽村市
板橋区
八丈町教育委員会

目次 Contents

既知との遭遇、巡るその先へ／河原功也	6
井口直人 IGUCHI Naoto	12
嶋暎子 SHIMA Eiko	20
舛次崇 SHUJI Takashi	28
武田拓 TAKEDA Hiraku	36
鶴川弘二 TSURUKAWA Koji	44
納田裕加 NOUDA Yuka	52
各会場風景	60
出張イベント・関連イベント	66
鑑賞ガイド	72
作品リスト	73
Greetings	77
Essay / KAWAHARA Koya	78
List of Works	82

既知との遭遇、巡るその先へ

河原功也(東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員)

本稿では巡回展の渋谷会場の展示を振り返り、既知のものから再構築された未知の造形との遭遇がもたらすアール・ブリュットの魅力に迫っていく。

展示室に向かう廊下には、自身の顔をお気に入り品の品とコピー機で印刷し続ける井口直人の作品が壁面を埋め尽くすように貼られている。手前から紫、黒、青、緑、黄色とグラデーションのように続く。井口は二色刷りをベースとしながら、一度印刷した紙を手差しトレイにいれ、再び印刷することで、色が混合したサイケデリックな配色の作品を生み出した。境界が曖昧にゆらぐスペクトラムな画面は、現代アーティストとの出会いによって生まれたという。地と図のゆらぐ不定形の中に、缶やシール、砂糖、タイムカードなどといった見知ったものを見つけたときの不思議な感覚は何なのだろうか。鑑賞者は、見慣れないものと見知ったものを同時に目にすることで、妙に生々しく浮かび上がるモチーフに引き込まれる。

井口は自身で印刷した作品を折りたたみ、透明なテープで補強し穴を開け、輪ゴムを通して腕章をつくり、身につける。あるいは、そのまま道路に置いて風に吹かれる様子を眺める。そして、福祉施設の外に出て、近隣のいくつかのコンビニのコピー機を使って即興制作に勤しむこともある(もちろん、お気に入りの缶ビールや日用品を購入してから)。作品の形態は変化し、制作環境も変化し、そこで起こる出来事や出会う人も常に変化している。一定のゆらぎを保ちながら、井口は作品の前後そのものを楽しむ。そうして、日常のさま

ざまな関わり合いによって魅力的な作品を生み出し続けているのである。

展示室に入ると、広告チラシを切り抜き貼り合わせた高密度のカラージュ作品を制作する嶋咲子の作品が年代順に並ぶ。嶋の生まれ育った東京をテーマに制作された100号サイズの「万華鏡」四連作は、さまざまな家の切り抜きによってキャンバスの大半が埋め尽くされている。作品の前に立つと、引き寄せられる感覚と同時に近づきがたさを感じる。それは遠い山を眺めるときの身体感覚に近いかもしれない。遠方にたたずむ手の届かないものの雄大さと、手作業で構築された高密度の物質感に圧倒されるのだ。一方で、モチーフの組み合わせ方は非常にユーモアたっぷりである。日常的に見知ったものが不思議な組み合わせによって出会い直し、小さな物語を紡いでいる。

自身の作品について、「作者自身に余白がないみたい」だと制作当手を振り返っていたが、家事や介護に追われる目まぐるしい日常生活の現実味や重みが直接的に作品に注入されていることを想起させる。そして、その率直さは結果的に、多くの人を惹きつけ共感を生む作品となった。視点を移してからの近作では、余白のある作品や、机の上で制作できる10号サイズの作品など、これまでとは異なる作品作りが始まっている。制作の合間に家事をしていたと話す嶋は、今なお忙しい日々を過ごしているが、頭には常に作品のことがあるという。「万華鏡」シリーズの未完の作品《万華鏡 No.1》が見られる日もそう遠くはないかもしれない。

その隣には、油性の赤ペンを紙にじっと当て続け、染み出したインクのにじみで点を描

く鶴川弘二の平面作品がグリッド状に展示されている。近づいて見ると、円周部分はぎこちなく波打ち、輪郭のゆらぎや濃淡が不規則なリズムを刻んでいる。何も描かれていない余白と赤い点は、夜空と星の関係のように目には見えない無限の広がりを感じさせる。赤い点と点の間には、日常的に聞こえていた母の言葉やテレビCMの音声などが不思議な記号や文字に変換されて、そっと置かれている。描画された赤い点の群れと変形された文字は、適度な距離があったり重なったりして、まるで同じ場所から湧いて出てきたかのように、同一平面上に定着している。数字の「4」を変形させたような矢印や十字架に見える象徴的な記号や、「龍角散」、「ヴィックスドロップレモン」といったど飴を思わせる商品名、「たたけへん」、「よびにくるわ」、「あしたまがまん」(鶴川は「だ行」が「ら行」に置き換わる)といった会話の一部のような言葉も発見できる。制作環境にある音や声が鶴川の中で共鳴し、視覚化されていったように思われる。具象と抽象の間を縫うように展開する鶴川の作品は、前衛的な詩作の趣を感じさせるが、一方で、鶴川にとっての日常的な言葉がこぼれて、目に見える形で集積していったものかもしれない。

さらにその奥には、舛次崇のパステルで厚く塗り重ねられ描かれた平面作品が並ぶ。舛次は、植木鉢や瓶、椅子、電球などといった具体的なものをモチーフにしなが、それらを幾何学的な形へと変換して描く。制作時は、身近な日用品からアトリエにある道具などをスタッフが4つほど選び舛次の机に並べておき、その中から舛次が描くモチーフとそれに合わせて描く紙を選んでいったという。主に青、黒、白、茶の4色のパステルを使用する舛次だが、本展では赤や黄、緑といった配色の植物や日用品の絵も合わせて展示している。

制作初期から描いている植木鉢や黒塗りが印象的な動物の絵といった代表的な半裁サイ

ズのもの、塗り込みや輪郭線の力強さが感じられる。一方、2010年以降から晩年にかけての四つ切りサイズの作品は、潔さとユーモアが増したように見える。スタッフの方が「晩年は思うように描けなくなっていたようだった」と振り返っていたように、筆致の圧力が抑えられてはいるが、モチーフの一部分に焦点を当てた独特な切り取り方や、地と図が反転するような視覚的な遊び、楽しい配色など、どこか鑑賞者の反応を楽しむかのようなところもある。作家本人の変化がありながらも、スタッフとの揺るがない間柄が舛次の制作の根幹を支えていたのではないだろうか。

展示室1の中央には、納田裕加が廃棄された糸や布の切れ端を丸め、巻き固めたオブジェ《のうだま》が置かれている。繭のような形や人型のフォルムは生命感にあふれ、今にも動き出しそうである。《のうだま》は、糸や布の端切れといった小さなものが連なり、中心から外側に向かって少しずつ塊になることで形成される。この制作方法からは、同じく糸を巻いて立体作品を生み出した作家ジュディス・スコットとの類似点がある。スコットの場合は、身の回りにある品(車輪や椅子、ハンガーなど)を包み込むことで、内包物を保護あるいは隠す構造をもっているとする。糸の強固な巻き方や絡み方が繭や蜘蛛の巣を思わせ、護符や呪物の類のような物々しい印象を与える。一方の納田は、内包されるものと行為が意味を帯びるというよりも、作品の表面の配色や模様、全体の形のほうに力点が置かれているところがやや異なる。加えて、丸い目やにやりと笑う口が愛嬌のある表情を生む点も特徴である。人を笑わせることが好きだという作者本人の面影を感じさせる。最近目は疲れるため、織物系の作業は控えめとのことだったが、元々作品作りへのモチベーションが高いこともあり、同じアトリエの仲間たちと刺激し合いながら、今も新たな作品作りに励んでいることだろう。

隣の展示室2には、数えきれないほどの数の割り箸を組み合わせて作られた武田拓の立体作品が静かに鑑賞者を待ち受けている。重量を感じさせる造形と素材に使われている廃棄された割り箸の組み合わせが意表をつく。元はラーメン屋や蕎麦屋、ときに老舗料亭で使用されていた割り箸が素材となっている。ひと挿しひと挿しの小さな行為の集積が形となり、かえりみられることのなかったはずのものが輝き、残されることとなった。細部を見ると割り方や噛み方など、割り箸にもささやかな違いがあることがわかる。割り箸を挿すという反復行為は、伝統的な彫刻の削る手法とは異なり、どちらかという、生花の挿花や田植えの所作に似ている。一つ一つが強固なわけではないが、行為を重ねることで結束力をもつのだ。

武田の作品は突如、福祉施設内で制作されたものであるが、展示の機会が生じたことにより、運ぶための箱が作られ、それに伴う指示書や作品情報の整理などが必然的に発生した。武田の作品に魅了され、展示や保管を通してどうにか残していこうとする人たちのさまざまな試行錯誤があったからこそ、今回の展示が可能となったことをここに書き残しておきたい。

以上、ブリコラージュを起点としたそれぞれの作家の独自の表現を振り返ると、身の回りにある既知のものに対する見方が変わった人もいだろう。筆者自身、自分の中で固まっていた意識が揺さぶられるような感覚、既知のものもつ可能性、その先にある姿に驚いた。アール・ブリュットには必要性と即席性から成る作品が多い。作者の身の回りにあるものや環境、状況が作品に総動員されるからである。ゆえに、作者の味わい深い人生を、作品あるいは使われる素材が静かに語り始めるということが起きる。

加えて、近年の日本のアール・ブリュットを取り巻く状況には、自律した「作品」や「作

家」という「個」のあり方を前提としつつ、「創作プロセス」や「共同体との関係性」が注目される傾向があると思われる。本展の場合、井口や武田の作品が施設スタッフとのコミュニケーションや信頼関係によって成り立っていること。または、嶋や納田が一日の終わりに自室で自分だけの時間を活用してこつこつと制作を続けてきたこと。そして、舛次と鶴川は福祉施設の運営するアトリエにより伴走者がいるという環境だったことなどがその一例である。このように素材だけでなく、制作行為や環境、周囲の人との関係性が組み合わさることで独自の作品が生まれてきた。この点からも「個」の境界を揺さぶる刺激物というアール・ブリュットの魅力が感じられる。既知のものが固定化されずに巡り、新たな遭遇が起きることを今後も期待したい。



凡例

- ・ 作品の情報は、東京都渋谷公園通りギャラリーの調査したデータに加え、作家と所蔵者から提供されたデータを参照した。
- ・ 作品リストには、作家別に、「作品名」、「制作年」、「材質・技法」、「サイズ（縦×横 cm）」、「所蔵先」の順に記載した。
- ・ 各作家ページの作品キャプションには、「作品名」、「制作年」、「所蔵先」を記載した。
- ・ 作家解説は河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）が執筆した。
- ・ コピーライト / 写真クレジットは、巻末に記載した。

Notes

Information on the artworks is based on the data provided by the artist and the collector, in addition to the data researched by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

List of works includes, by each artist, the information for each artwork is given in the following order:
Title, Date, Materials, Size (height×width, cm), and Collection.

The Caption of each artist's page is given in order of Title, Date and Collection.

The artist commentary was written by KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery).

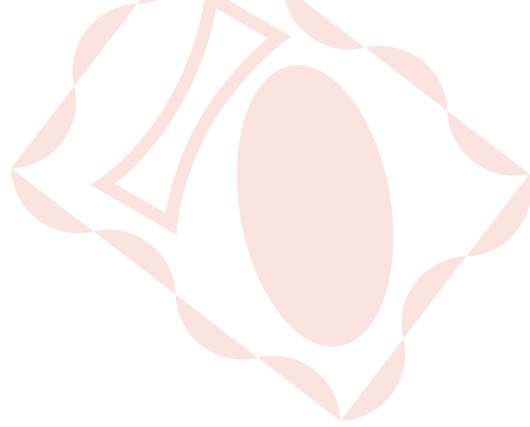
Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue.



井口直人

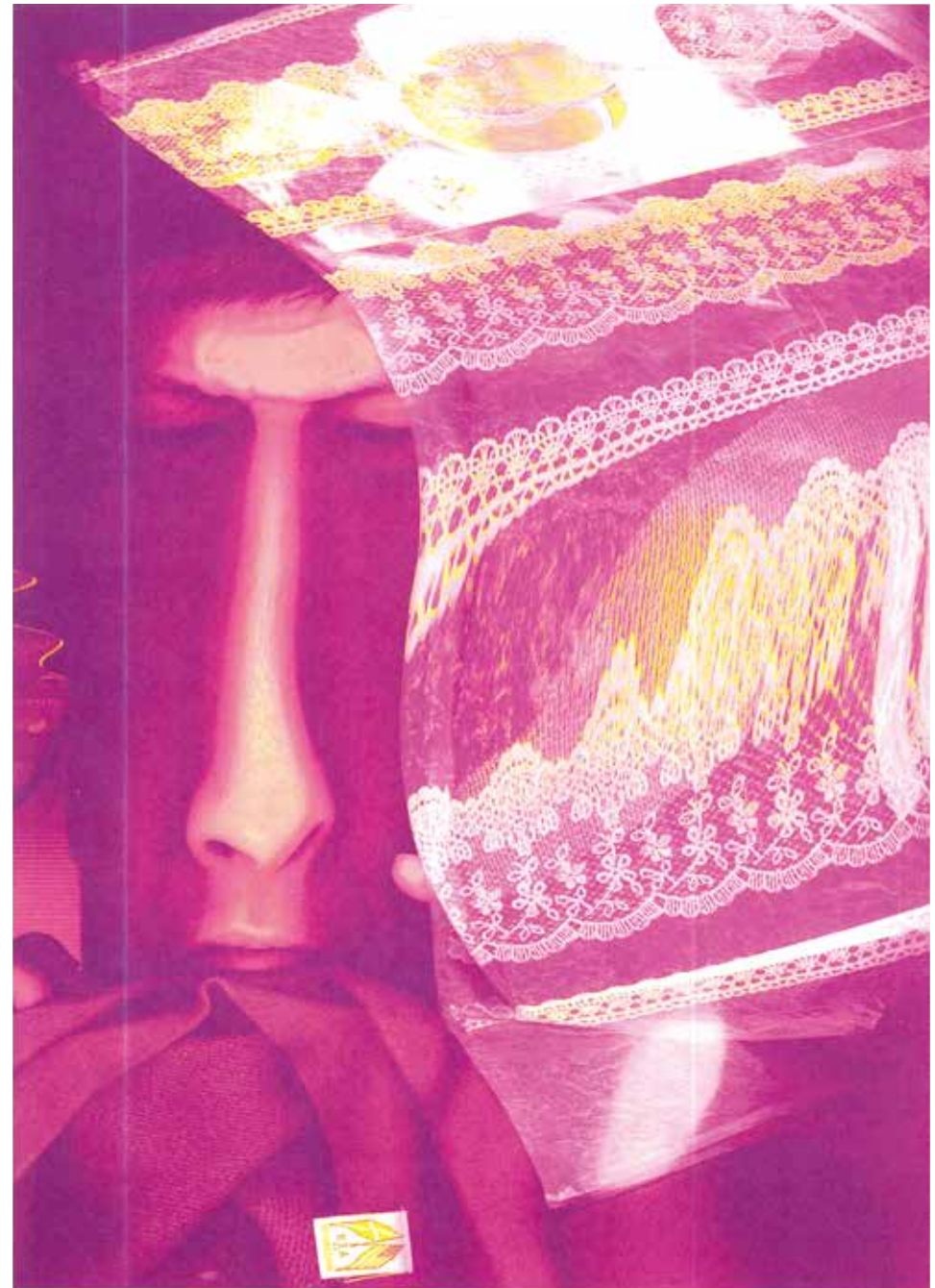
1971年 三重県生まれ

Born in 1971, Mie Prefecture



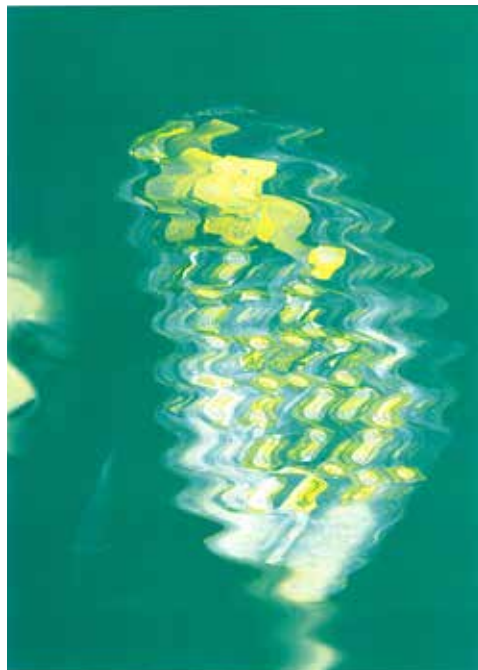
1987年より名古屋市にある福祉施設「さふらん生活園」に所属している。コピー機を使って自分の顔と身近にあるものを「撮影」する。コピー機が導入されたことをきっかけに、施設スタッフとの遊びのなかから生まれた独自の表現は22年以上続く日課となった。井口は、幼少期から工業製品特有の無機質で硬質なデザインを好む。レース柄のビニール袋や懸賞シール、缶コーヒーなどのお気に入りの品と自分の顔をガラスの原稿台に並べ、同一平面上に即席で構成されたそれらの物々は、井口の手により小刻みに揺らされる。そうすることで、奇想天外なゆがんだ物体が印刷面にあらわれる。二色刷りの効果も相まって、まるで深海の水の中やエコー写真のようなゆらぎの世界が映し出されるようだ。この即興性のある創作のなかには、緊張感と高揚感が混在している。気づけば推定5万枚を超える作品群となり、今なお増えつつけている。近年では施設への来訪者との協働で、文字通り顔を突き合わせた即興コピーも行われており、この表現は井口にとってコミュニケーションの触媒としても働いている。

Iguchi has been associated with Safuran Seikatsu-en, a welfare facility in Nagoya City, since 1987. He uses a copier to “photograph” his face alongside everyday objects. What started as playful experimentation with staff when the facility got a copier has developed into a daily practice spanning over 22 years. Since childhood, Iguchi has been attracted to the inorganic, hard-edged designs typical of industrial products. He arranges his favorite items—lace-patterned plastic bags, prize stickers, canned coffee—alongside his face on the document glass, creating instant compositions on the same plane. He then gently shakes these objects, producing fantastically distorted forms on the printed surface. Combined with the two-color printing effect, the results evoke undulating worlds reminiscent of deep-sea waters or ultrasound images. This improvisational creative process mixes tension with elation. His body of work has grown to an estimated 50,000 pieces and continues to grow. Recently, Iguchi has collaborated with facility visitors to create instant copies, literally placing their faces together—showing how this expression acts as a catalyst for communication.



《無題》 2018年 さふらん生活園 蔵
Untitled 2018 SFRN





《無題》 2005-2023年 さふらん生活園 蔵
Untitled 2005-2023 SFRN



〈羽村市会場〉



〈板橋区会場〉

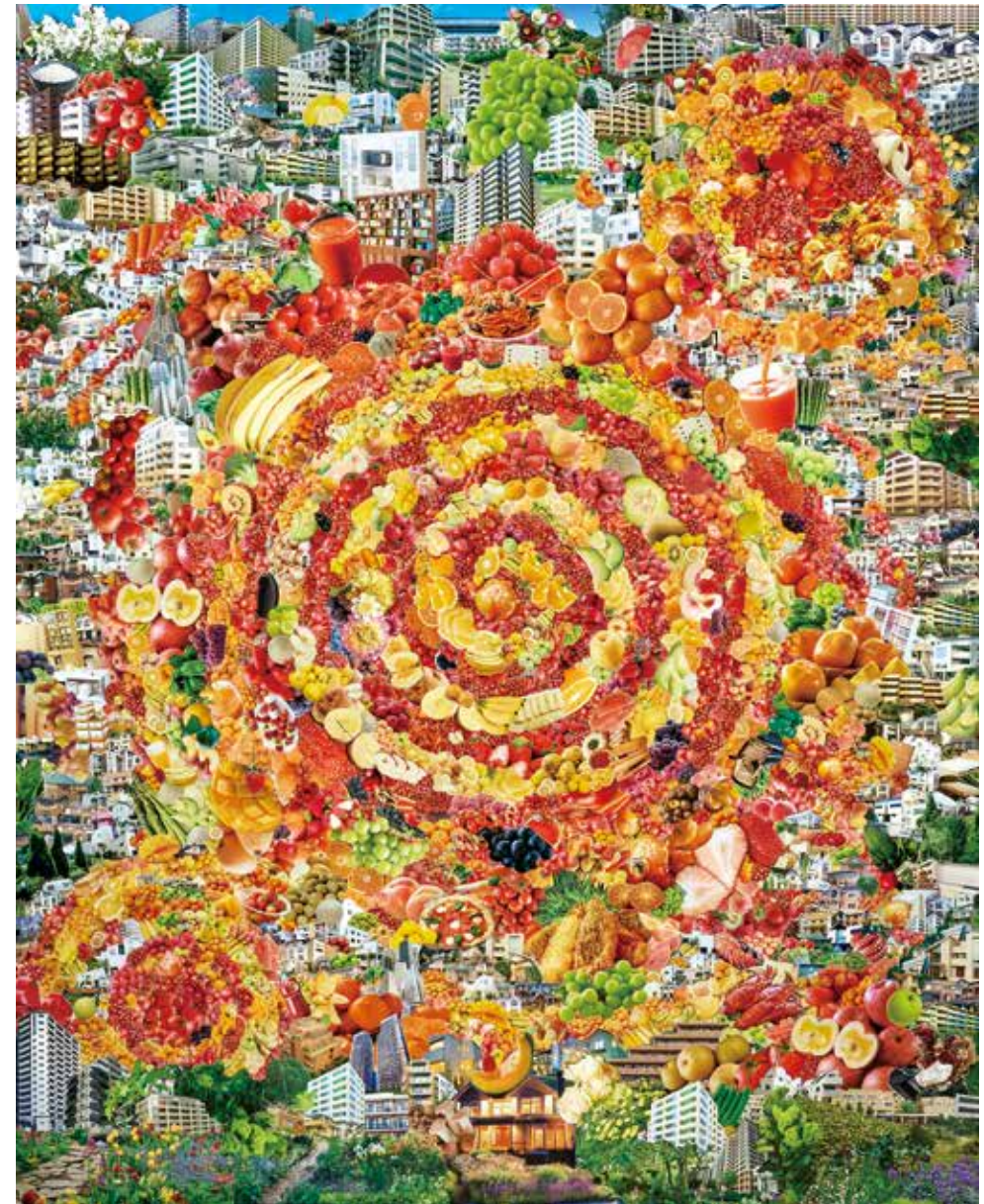
嶋暎子

1943年 東京都生まれ

Born in 1943, Tokyo Prefecture.

50代で仕事を引退し、高校時代に独学で習得した切り絵や貼り絵、コラージュの創作に専念する。版下製作の仕事で培われた技術を駆使しながら、家事を終えた夜遅くにコツコツと創作を続けてきた。毎日届く広告チラシから住宅や家具、果物、宝石といった生活の地続きにあるモチーフを切り抜く。それらの断片を絵具に見立て、赤や青、緑…といった色に還元し、キャンバスに貼りあわせ高密度なコラージュ作品をつくりだす。切り抜く際に少しだけ輪郭に余白を残すことで立体感をもたせ、一見すると手描きのような画面の質感となっている。同時に、切り抜いたモチーフの意味や縮尺を意外性と遊びの感覚によって組み合わせ、ユーモアのある詩的世界を創り出す。たとえば、建物の屋上に大きな野菜が生えていたり、魚が高層ビルのように垂直に立っていたりする思いがけない風景のように。架空の都市を模した大型連作の風景画は、制作当時の嶋自身の心情や状況を物語る。この都市は、作り手の生きる世界であり、かつ、もうひとつの世界でもあるのだ。

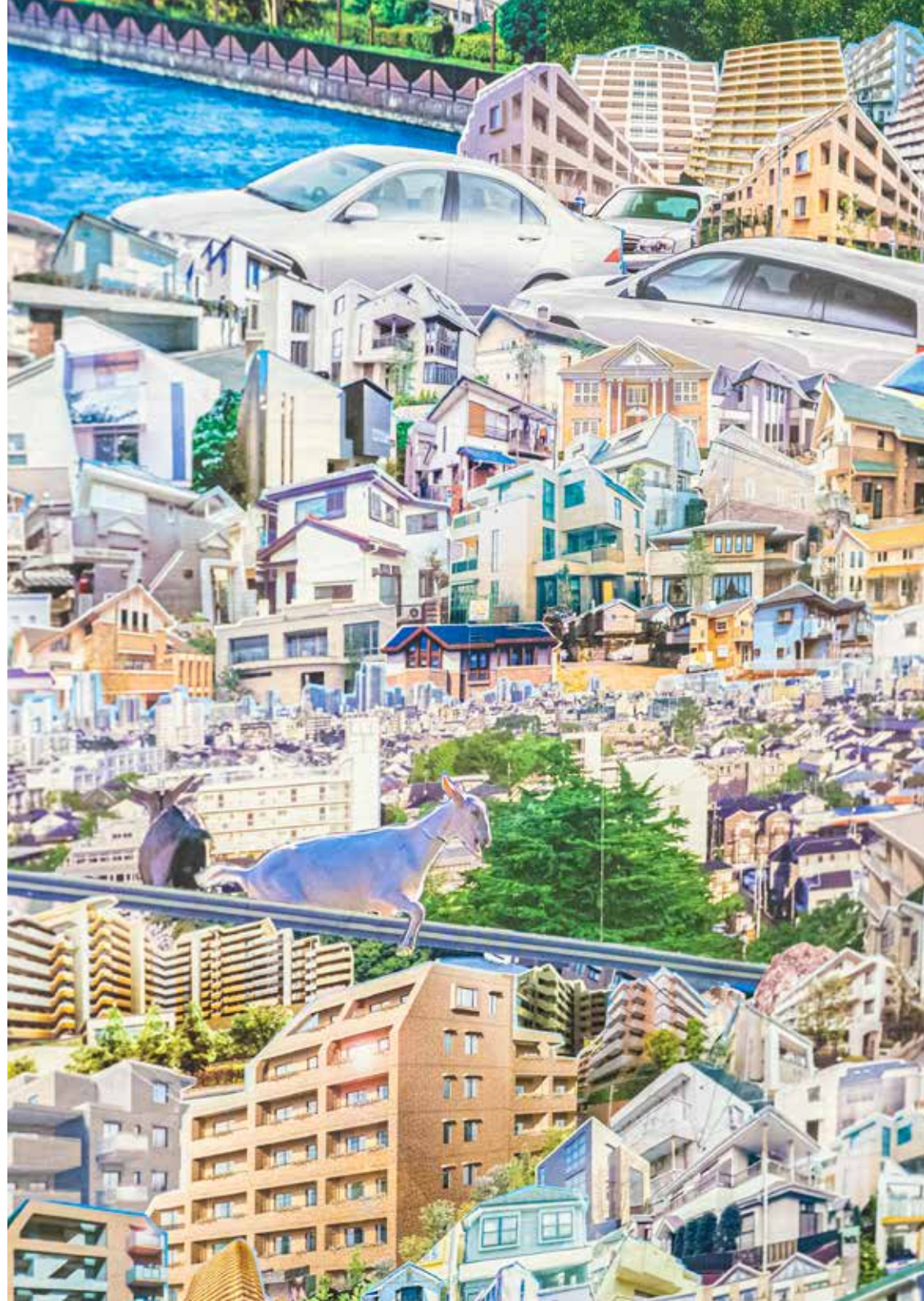
After retiring in her fifties, Shima dedicated herself to creating paper cutouts, paper pastings, and collage works—techniques she taught herself in high school. Drawing on skills honed through her work in paste-up production, she continues creating late into the night after completing her household chores. She cuts out motifs related to everyday life—houses, furniture, fruit, jewelry—from daily advertising flyers. Treating these fragments as paint, she reduces them to colors—red, blue, green—and assembles them on canvas to craft intricate collage works. By leaving slight margins around the contours when cutting, she creates a three-dimensional effect, making surfaces appear hand-painted at a glance. She also blends the meanings and sizes of her cut-out motifs with a sense of surprise and playfulness, creating a humorous, poetic world. For example, she depicts unexpected landscapes where giant vegetables grow on the rooftops of buildings or fish stand vertically like skyscrapers. Her large-scale serial landscapes of fictional cities mirror Shima's emotional state and circumstances at the time of creation. These cities embody both the world she inhabits and an alternate reality.



《明日に向かって撃て》 2022年 作家蔵
Sun 2022 Collection of the artist







左上:《降る》 2025年 作家蔵
Air Pollution 2025 Collection of the artist

右上:《愛の讃歌》 2024年 作家蔵
La Vie En Rose 2024 Collection of the artist

左下:《暗黒舞踏》 2024年 作家蔵
Butoh Dance 2024 Collection of the artist

右下:《スクラップ アンド ビルド》 2024年 作家蔵
Scrap and Build 2024 Collection of the artist

舛次崇

1974年兵庫県生まれ、2021年没

Born in Hyogo Prefecture (1974-2021)

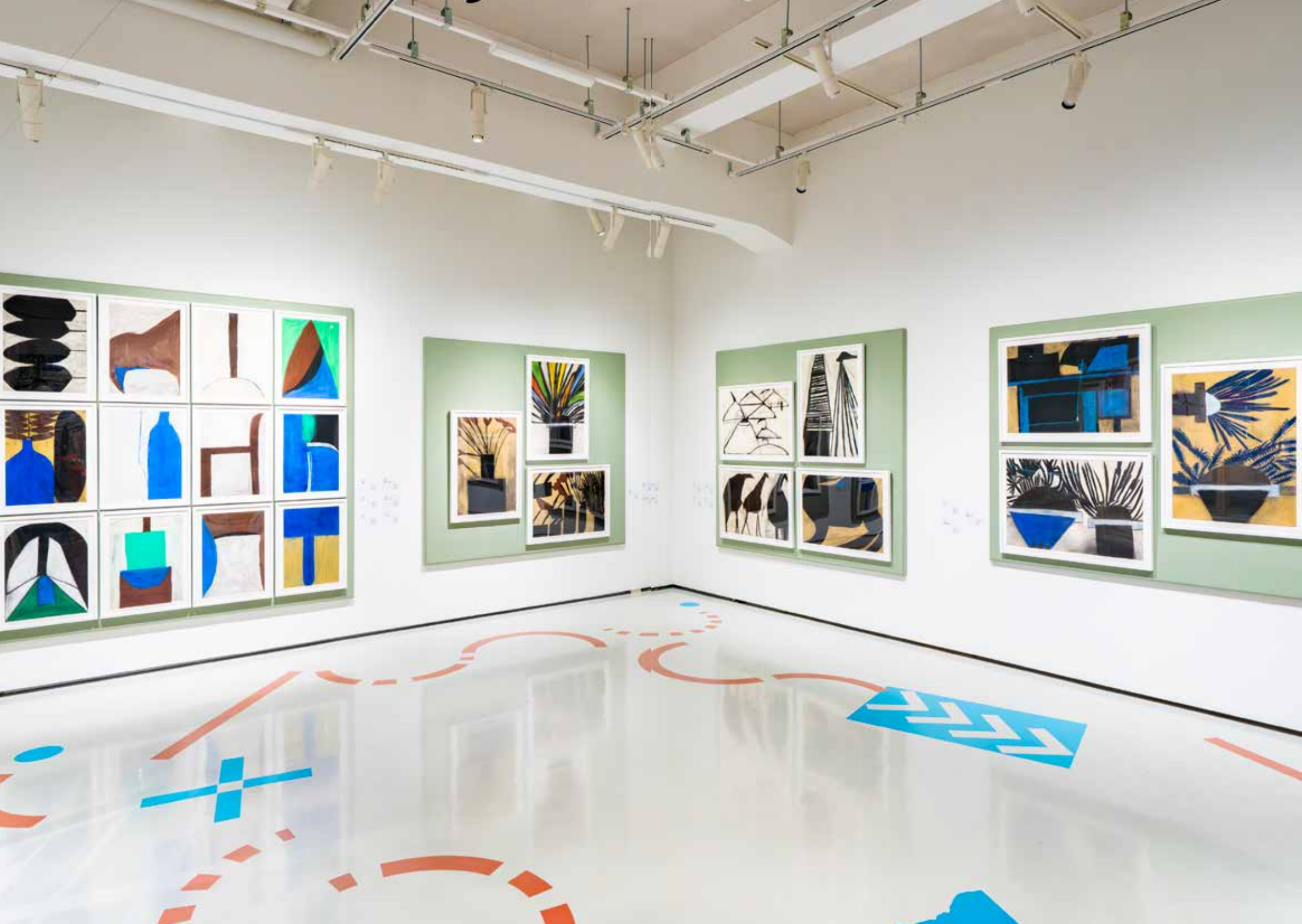
1993年より兵庫県・西宮市にある「すずかけ絵画クラブ」にて制作を開始。主に黒や青、茶、白色のパステルを何度も塗り重ね、厚みのある画面の質感の絵を描く。描かれた形は強い逆光を浴びた巨大な建物のように、くっきりとした輪郭をもつ。黄ボール紙や水彩紙に覆いかぶさるような姿勢で絵を描くため、手や腕に付着したパステルが余白部分に靄のように広がる。エッジのきいた輪郭との対比で、ぼやけた部分には奥行と動きのある立体感が生じている。モチーフには、植木鉢や画材、工具といった日用品、野菜や果物などさまざまなものが描かれるが、水平方向からの視点で大胆に切り取られ、配色も実物と異なるため、未確認物体のような不思議さが漂う。稜線のようなアウトラインを描いてから、内側に色を塗り重ねていく。何度も何度も紙に押し付けながらこすることで、摩擦によって粉々になったパステルが、くっついては剥がれ固まっては崩される。描きながら消しているような、独特な描画だ。よく見ると絵の表面にはボツボツとした凹凸がある。まるで先ほどまで描いていたかのような生々しさと迫力が、静けさとともに押し寄せるかのようである。

Shuji started creating art at Suzukake Art Club in Nishinomiya City, Hyogo Prefecture, in 1993. He mainly used black, blue, brown, and white pastels, layering them repeatedly to produce paintings with thick, textured surfaces. The forms he depicted have sharp, defined contours, like massive buildings backlit by intense light. Because he painted while hunched over yellow cardboard or watercolor paper, pastel dust would adhere to his hands and arms, spreading like mist across the blank areas. This contrasts with the sharp edges and lends depth and dynamic three-dimensionality to the blurred sections. His motifs varied widely—potted plants, art supplies, tools, and other daily necessities, as well as fruit and vegetables—but from a horizontal perspective with bold cropping and colors that differed from reality, they evoke the mysterious quality of unidentified objects. After drawing ridge-like outlines, he would layer colors inside. By repeatedly pressing and rubbing against the paper, friction pulverized the pastel, causing it to stick, peel, solidify, and crumble. It's a unique drawing method that seems to erase while creating. Close inspection reveals a bumpy, uneven surface texture. The raw power and presence, as if he had been drawing just moments before, surge forward along with a profound stillness.

SHUJI Takashi



《きりん3》2009年 社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ 蔵
Giraffe 3 2009.2 Suzukake Art Club





《植木鉢の花く》 2000年 社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ 蔵
Flower in a flowerpot "KU" 2000 Suzukake Art Club



《ミシン》 2006年 社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ 蔵
Sewing machine 2006.8.7 Suzukake Art Club



《うし》 2009年 社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ 蔵
Cow 2009.12.13 Suzukake Art Club



武田拓

1988年 山形県生まれ

Born in 1988, Yamagata Prefecture

2007年より山形市にある福祉施設「わたしの会社」に所属している。武田は、使用済みで廃棄された割り箸を薪として再利用するための、割り箸を牛乳パックに詰める作業を行っていた。ある日、割り箸が牛乳パックに入る容量を超えても武田の手は止まらず大量の箸を挿していき、次第に造形物となっていった。施設のスタッフが壺や籠などの容器を用意するなどのサポートをしながら、約2か月かけて最大2メートルを超える作品8点が完成した。箸と箸が重なり合う接合部はボンドや粘土で固定されているが、ほとんど箸だけでできている。制作中は、離れたり近寄ったりを繰り返し、全体のバランスと細部を調整していたという。下から上に伸びる一本一本の割り箸の勢いからは、自分の体よりも大きな物体を組み上げる高揚感が感じられる。光の方向へ伸びる植物のような野性味と、今にも動き出しそうな躍動感が空間に動きを与え、遠心性を備えた彫刻のようでもある。一方、生成途中のような形状には、無秩序なようでどこか法則があるような、自然界にある結晶や植物の枝葉にみられる構造が潜んでいるかもしれない。今は《はし》の制作をしていない武田だが、今なお何かを組み合わせようと画策していることだろう。

Takeda has been associated with Watashi no Kaisha, a welfare facility in Yamagata City, since 2007. He was engaged in packing used disposable chopsticks into milk cartons for recycling as firewood. One day, even after exceeding a carton's capacity, Takeda's hands kept going, continuing to stuff large quantities of chopsticks until they slowly formed a sculptural object. With support from facility staff who provided containers such as vases and baskets, he completed eight pieces over roughly two months, the largest exceeding two meters in height. Although the joints where chopsticks overlap are secured with glue or clay, the artworks are made almost entirely from chopsticks. During the process, Takeda reportedly moved away from and back up to the artworks repeatedly, adjusting their overall balance and fine details. The momentum of individual chopsticks reaching upward from below captures the thrill of building objects bigger than oneself. A wildness similar to plants stretching toward the sunlight and a dynamism that makes the sculptures seem like they might move give the space a sense of movement—like sculptures infused with centrifugal force. Meanwhile, their seemingly incomplete shapes may hold structures similar to natural crystals or the leaves and branches of plants—appearing chaotic but following some underlying order. Although Takeda no longer creates with chopsticks, he is undoubtedly still planning to combine something new.



《はし》 2010年 作家蔵
Chopsticks 2010 Collection of the artist







《はし》 2010年 作家蔵
Chopsticks 2010 Collection of the artist

鶴川弘二

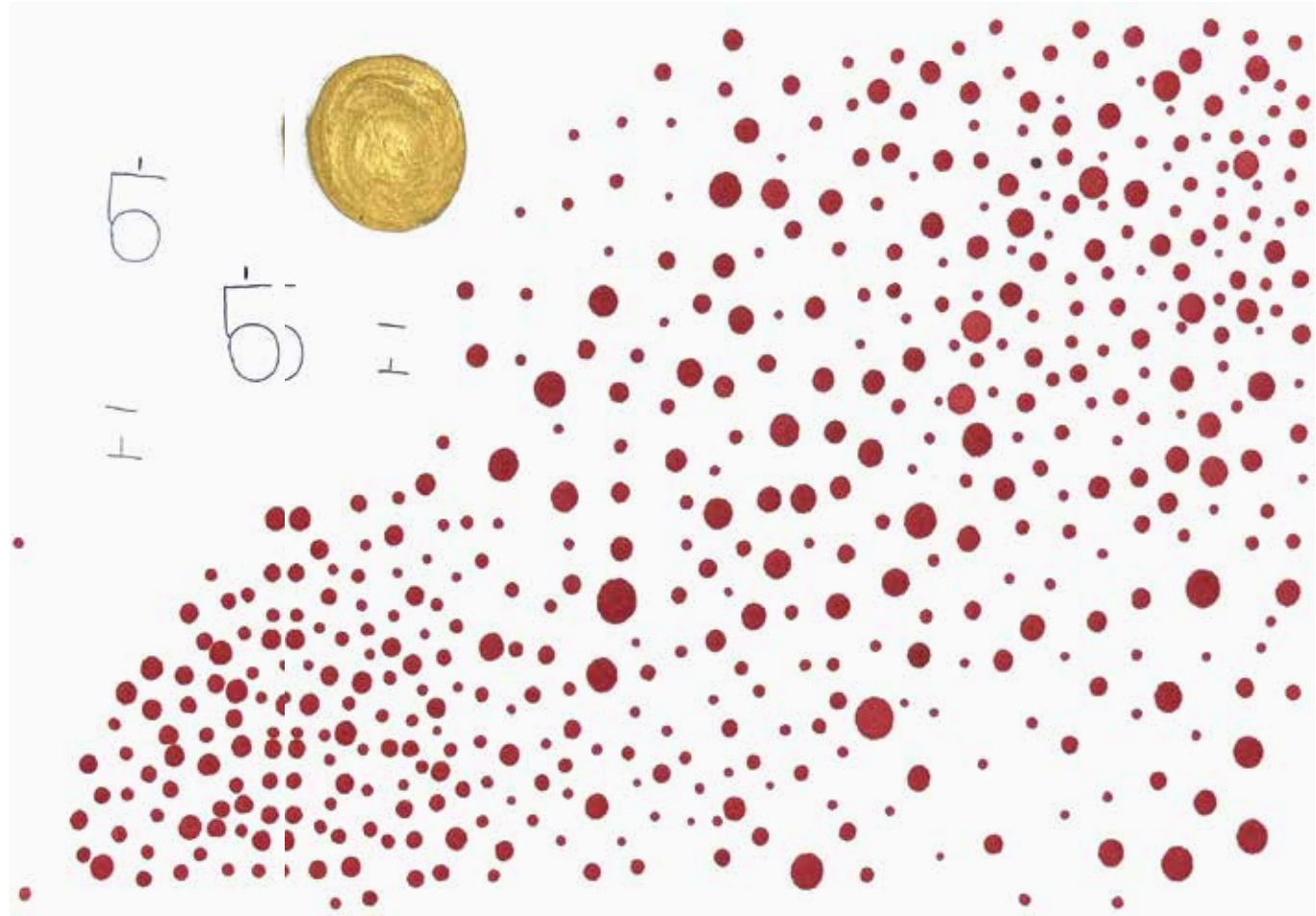
1973年 兵庫県生まれ

Born in 1973, Hyogo Prefecture

2014年より明石市にある生活介護事業所「すたじおぼっち」に所属している。油性のペンをにじませた染みによって、大小さまざまな赤い点が点在した絵を描く。ペンを動かさずに、ただじっと紙にペン先を当てつけ、じわじわと染み込むインクが微かに波打つ円形となる。紙面を覆うように密集した点や、片隅に寄っている点、横断するような線状の点など、さまざまな点の描き方がある。赤い点のほかに、点と点の間を埋めるように、あるいはその間を浮遊するように、数字や文字を変形した独自の記号が描かれる。解読できる文字列のなかには、心のつぶやきのような一言も現れるが、主にはチラシのフォントを模した図柄、テレビCMで流れる音声、母の言葉など、日常的に鶴川が見聞きした情報を抽出し描いているものが多い。また、制作に使用するペンを丁寧にビニールで包み、その上からセロハンテープをぐるぐる巻きにしたオブジェを並行して制作していた時期がある。半透明のテープが何層にも重なるべっこう色のくびれのなかに、ペンと染みを待つゆっくりとした時間が封じ込められている。

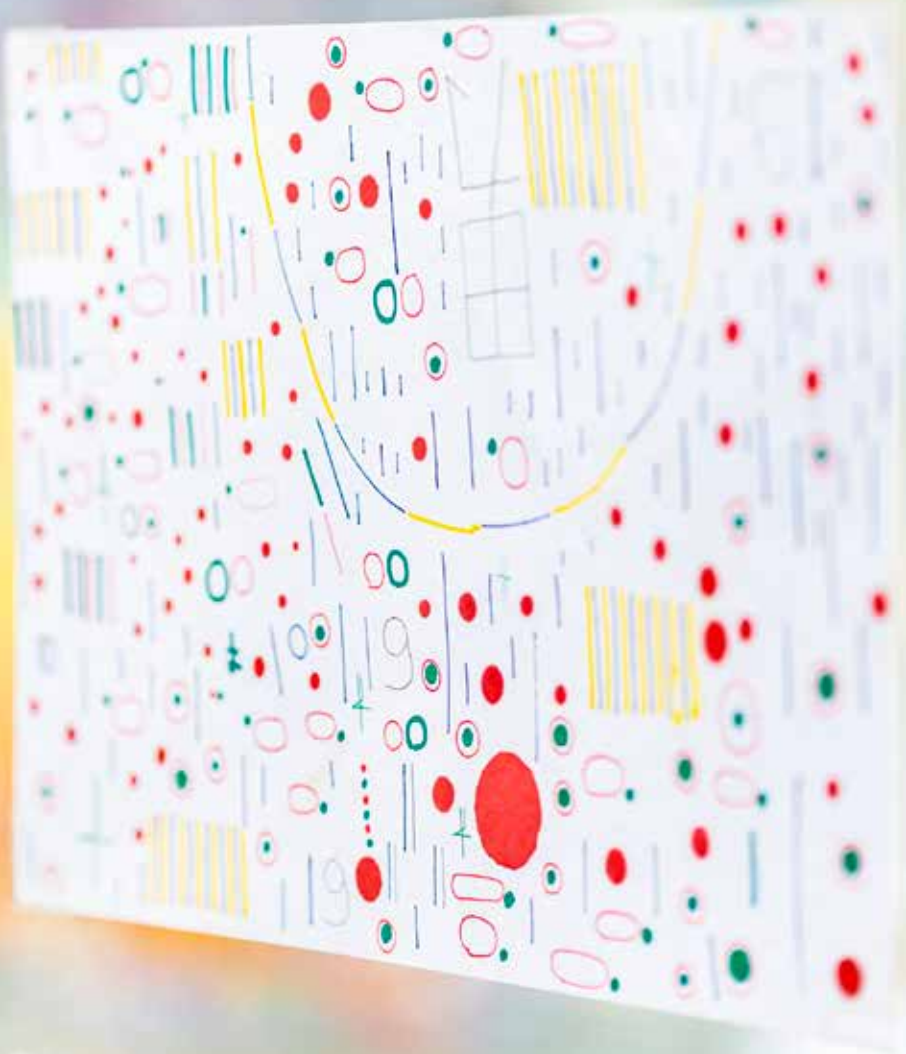
Tsurukawa has been associated with Studio Pocchi, a daily life support facility in Akashi City, since 2014. He creates paintings spotted with red dots of various sizes made by bleeding oil-based pen ink. Without moving the pen, he simply holds the tip against the paper, letting the slowly seeping ink form subtly undulating circles. His techniques vary: densely covering the paper with dots, clustering dots in corners, or creating intersecting linear patterns. In addition to red dots, he draws unique symbols—deformed numbers and letters—as if filling the gaps between the dots or floating them in those spaces. Among the decipherable text, words that seem like the whisperings of his heart occasionally emerge, but mostly it consists of patterns mimicking flyer fonts, voices from TV commercials, or his mother's sayings—information Tsurukawa encounters daily, extracted and drawn. He also spent a period creating parallel works: objects made by carefully wrapping his pens in plastic, then winding cellophane tape around them repeatedly. Within the amber-colored constrictions formed by multiple layers of translucent tape, the slow passage of time spent waiting for pens and stains is sealed away.

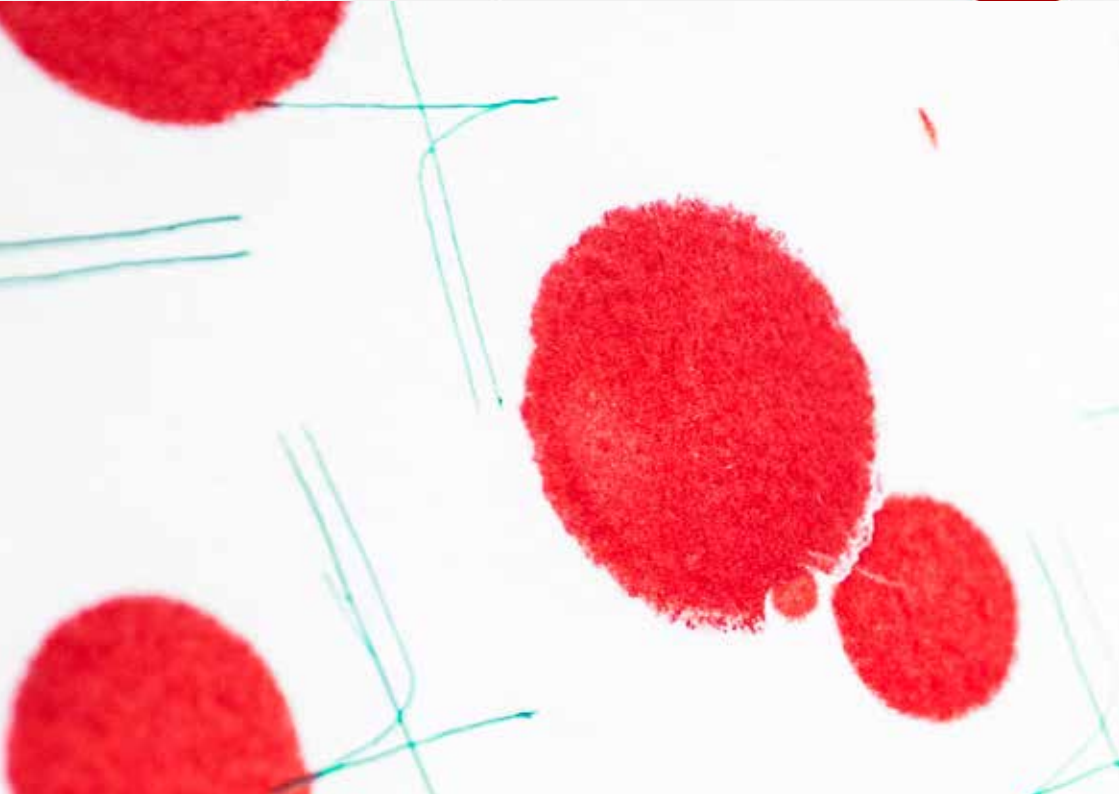
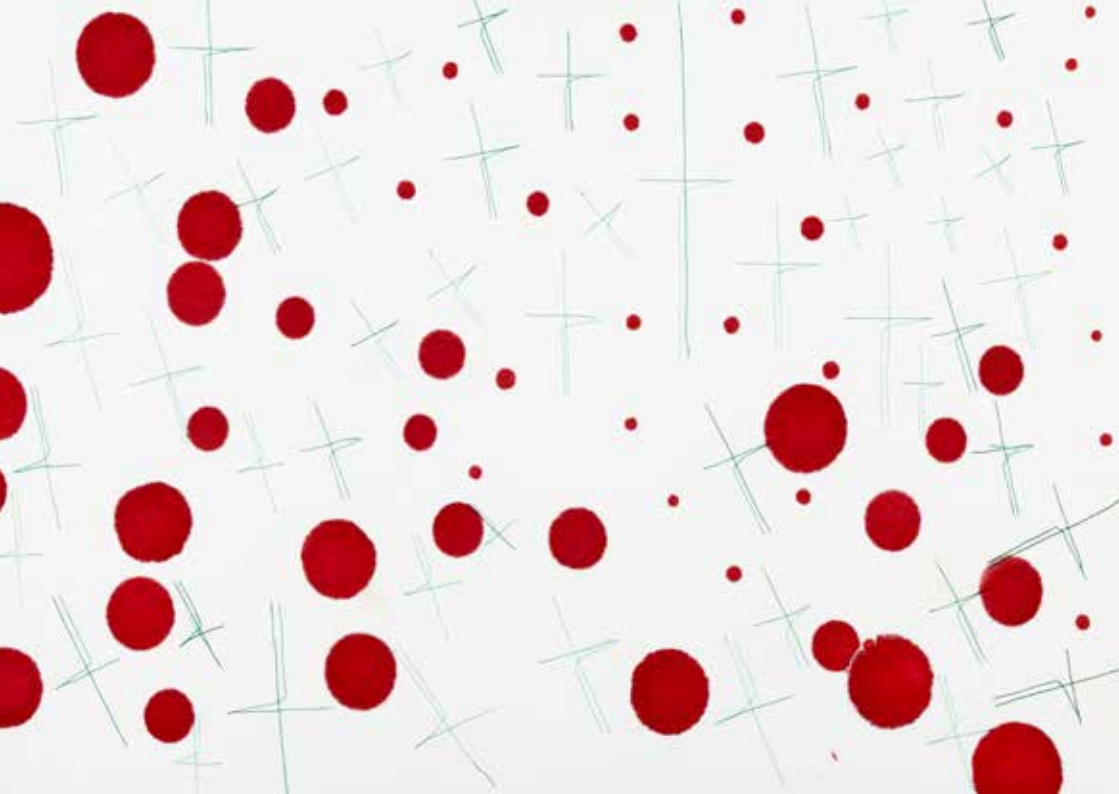
TSURUKAWA Koji



《無題》 2013-2019年頃 社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち 蔵
Untitled circa 2013-2019 Studio Pocchi







納田裕加

1966年 埼玉県生まれ

Born in 1966, Saitama Prefecture



2002年より川口市にある「川口太陽の家・工房集」に所属している。工房で廃棄される糸や布の切れ端を拾い集め、巻き固めた、「のうだま」と自ら名付けるオブジェを作っている。糸の芯材を支持体にして糸を巻いていき、そのやわらかな線が重なり合い、繭や人型のフォルムが生まれる。細かい糸の集まりは樹木に群生するやわらかい苔のように生き生きとし、今にも動き出しそうな生命感にあふれる。コミカルな見た目に反して、ぎっしりと糸が積層した重みがあり塊としての存在感もある。織物や絵画の制作も行う納田は、工房の仲間たちの作品や創作活動に刺激を受けながら、自分自身の作品の制作のきっかけや手法を模索してきた。「のうだま」は、工房ではなくグループホームの自室で夜な夜な創作されている。色彩や素材との対話をひとりでじっくりと楽しんでいるのかもしれない。細かな糸の破片を器用に結び合わせ再生する手法は、納田の描く絵画の世界にみられ、部分が連なり全体をなす手法である。継ぎ接ぎでできた愉快的なモンスターたちは、無邪気な顔でこちらを眼差している。不気味さとかわいさとは表裏一体であることを物語るようでもある。

Nouda has been associated with the Kawaguchi Sun House Kobo-Syu workshop in Kawaguchi City since 2002. She gathers discarded threads and fabric scraps from the workshop, and winds them tightly to create objects she calls "noudama." Using thread spools as the base of her artworks, she wraps thread around them, with the soft lines overlapping to form cocoon-like or humanoid shapes. The delicate thread clusters look as lively as soft moss growing on trees, filled with a sense of being alive, as if they might start moving at any moment. Despite their comical appearance, they have weight from the densely layered threads, and a substantial presence as solid masses. Nouda, who also creates textiles and paintings, has explored various triggers and techniques for her own work while drawing inspiration from the creations and activities of fellow workshop members. The noudama are made not in the workshop but every night in her room at a group home. Perhaps she quietly enjoys a dialogue with colors and materials on her own. Her skillful technique of binding and regenerating tiny thread fragments appears in her painted worlds—a method where parts connect to form something whole. These charming monsters cobbled together gaze at us with innocent faces, as if to show that the uncanny and the cute are two sides of the same coin.



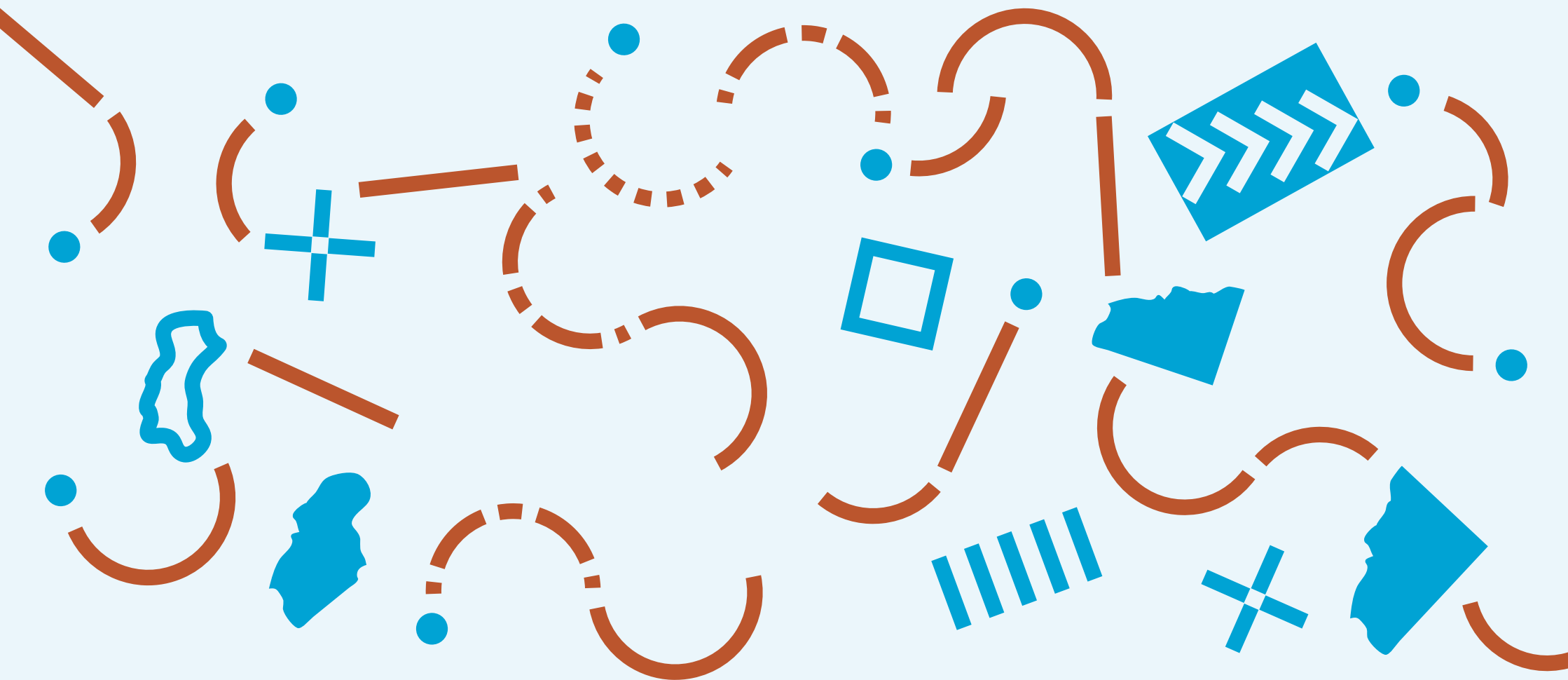
《のうだま》 2017年 社会福祉法人みぬま福祉会 工房集蔵
Noudama 2017 Kobo-Syu







各会場風景









出張イベント トーク & 創作ワークショップ

日時 2025年12月6日(土) 13:30-15:30
 会場 八丈町多目的ホールおじゃれ
 主催 東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー
 (公益財団法人東京都歴史文化財団
 東京都現代美術館)
 協力 八丈町教育委員会
 後援 八丈島文化協会

八丈町にて出張イベントを実施した。前半は展覧会を担当した学芸員より、アール・ブリュットについて紹介した後、展覧会会場の記録映像を上映しながら作家・作品紹介をした。後半は、出展作家の嶋暎子氏の広告チラシをつかったコラージュ作品を創作のお手本とした、創作ワークショップを行った。大量の広告チラシから、切り抜くモチーフを探し、ハサミで切り抜き、台紙に貼り付けていくというシンプルな創作プロセスのなかに、参加者それぞれの日常や関心事が垣間見え、短い時間ながら魅力的な作品がいくつも生まれた。



アーティスト・トーク① [手話通訳付き]

日時 2025年11月1日(土) 14:00-15:00
 会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
 展示室 1、2

登壇者 井口直人(出展作家)と関係者
 (「さふらん生活園」施設長 水上明彦)
 舛次 崇(出展作家) 関係者
 (「あとりえずすかけ」神田浩平、三栖香織)
 鶴川弘二(出展作家)と関係者
 (「すたじおぼっち」室本早知)

出展作家やその関係者と担当学芸員によるトークを行った。出展作品を前に、作品の特徴や制作秘話、作家自身についてお話した。



アーティスト・トーク② [手話通訳付き]

日時 2025年11月2日(日) 14:00-15:00
会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
展示室 1、2

登壇者 嶋 暎子 (出展作家)
武田 拓 (出展作家) と関係者
([わたしの会社] 施設長 遠藤暁子、花輪功喜)
納田裕加 (出展作家) と関係者
([工房集] 城田侑希、渡邊早葉)

出展作家やその関係者と担当学芸員によるトークを行った。出展作品を前に、作品の特徴や制作秘話、作家自身についてお話した。



「スーパーピッチョーネ」による スペシャルライブ

日時 2025年11月1日(土) 16:00-17:00
会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
交流スペース

11月1日(土)、出展作家の井口直人が所属する「さふらん生活園」と、「ヨナワールド」のメンバーと職員で結成されたバンド、スーパーピッチョーネによるスペシャルライブを開催した。



視覚障害のある方のための 触図をつかった鑑賞ツアー

日時 2025年11月16日(日)
10:00-11:30 / 13:30-15:00
会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
展示室1、2、交流スペース
協力 一般社団法人タップタップラボ、川村真也

出展作家のなかから3作家を選び、いくつかの作品を触図にして鑑賞ツアーを行った。熱を加えると凹凸加工が施される特殊な紙を用いた触図のほか、壁紙やフェルト、厚紙などの手触りの違う素材を組み合わせることで平面上に描かれる形や色、構成を伝える触図、実際に使われている毛糸や糸を用いて実作品を模した立体の触図などを作成した。



分身ロボット「OriHime (オリヒメ)」 とまわる鑑賞ツアー

分身ロボット「OriHime (オリヒメ)」を活用することで、遠隔での参加者と会場の参加者が同時に会場を巡り、ファシリテーターの案内のもと、ゆるやかに交流をしながら作品と一緒に鑑賞した。OriHimeの動きや視点に寄り添うことで、会場参加のみの臨場感では流れていってしまう鑑賞時のささいな気づきや共感が受け取りやすくなり、全体的に丁寧な作品鑑賞の時間となった。

[一般応募]
日時 2025年11月30日(日)
14:00-15:00 / 16:30-17:30
会場 東京都渋谷公園通りギャラリー
展示室1、2、交流スペースおよびオンライン
[福祉施設 (オンライン実施)]
日時 2025年11月25日(火) 10:30-11:30
参加施設 社会福祉法人武蔵野会 リアン文京
協力 一般社団法人タップタップラボ

鑑賞ガイド [全会場]

まめガイド

やさしい日本語を用いた文章や漫画を用いて
展覧会のテーマや出展作家を紹介

漫画 永畑智大

デザイン homesickdesign

テキスト・編集 東京都渋谷公園通りギャラリー



手話ガイド

出演 大和田舞香、佐々木彩乃 (鑑賞サポーター)

翻訳 大和田舞香、岡島珠実、佐々木彩乃、藤倉千裕、村上 諒、茂木侖奈 (鑑賞サポーター)

手話監修 長井恵里

手話通訳 清田千智、中村美裕、

ディレクター・撮影・編集 阪中隆文

企画・制作 竹野如花 (東京都渋谷公園通りギャラリー)



音声ガイド

展示作品やコンセプトを親しみやすい音声で紹介
ナビゲーター 瀬戸康史 (俳優)

作品リスト

タイトル	制作年	技法・材質	サイズ(cm) 縦×横×奥行	所蔵先
井口直人 IGUCHI Naoto				
無題	2005-2023	写真	サイズ可変	さふらん生活園
嶋咲子 SHIMA Eiko				
万華鏡 No.2	2003	チラシ、のり・キャンバス	162×130	作家蔵
万華鏡 No.3	2003	チラシ、のり・キャンバス	162×130	作家蔵
万華鏡 No.4	2004	チラシ、のり・キャンバス	162×130	作家蔵
万華鏡 No.5	2004	チラシ、のり・キャンバス	162×130	作家蔵
明日に向かって撃て	2022	チラシ、のり・キャンバス	162×130	作家蔵
タワマン	2023	チラシ、のり・キャンバス	100×80	作家蔵
あの町 この町 日がくれる	2023	チラシ、のり・キャンバス	100×80	作家蔵
スクラップ アンド ビルド	2024	チラシ、のり・キャンバス	53×45	作家蔵
暗黒舞踏	2024	チラシ、のり・キャンバス	53×45	作家蔵
愛の讃歌	2024	チラシ、のり・キャンバス	53×45	作家蔵
降る	2025	チラシ、のり・キャンバス	53×45	作家蔵

舛次崇 SHUJI Takashi

植木鉢の花 く	2000	パステル・黄ボール紙	74×55	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
植木鉢の花 こ	1999	パステル・水彩紙	55×78	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
植木鉢の花 せ	2001	パステル・水彩紙	78×56	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
植木の花と植物	不明	パステル・黄ボール紙	54×77	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
ハンガー	2007.7.12	パステル・水彩紙	54×79	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
脚立と三脚	2007	パステル・水彩紙	79×54	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
ミシン	2006.8.7	パステル・黄ボール紙	54×74	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
植木鉢	2008.4.10	パステル・黄ボール紙	77×54	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
きりん3	2009.2	パステル・水彩紙	54×79	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ
うし	2009.12.13	パステル・黄ボール紙	54×77	社会福祉法人 一羊会 すずかけ絵画クラブ

無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	水性マーカー、ボールペン、油性マジック・画用紙	27×39	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち
無題	2013-2019 頃	紙、テープ、ペン	サイズ可変	社会福祉法人 明桜会 すたじおぼっち

納田裕加 NOUDA Yuka

のうだま	2011	糸	11×58×9	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2012	糸	17×41×9	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2014	糸	17×50×50	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2017	糸	58×33×21	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2016	糸	20×55×59	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2017	糸	48×33×31	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2013	糸	45×30×30	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2015	糸	24×101×31	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2020	糸	56×77×23	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集
のうだま	2018	糸	55×64×58	社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集

Greetings

The Tokyo Metropolitan Government and Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery are excited to present the 2025 Art Brut* traveling exhibition: “Encounters with the Known: Welcome to the World of Autobiographical Bricolage!” This exhibition, which will be traveling to three venues across Tokyo, features six artists whose unique creative approaches have received recognition both in Japan and internationally in recent years.

“Bricolage” describes a creative and intellectual approach that doesn’t aim for a predetermined final form, but instead involves the spontaneous and flexible use of materials and tools at hand. By combining readily available objects in ways that diverge from their original purpose and function, this method goes beyond their intended use to create new meanings. This exhibition highlights artists who reconstruct new forms using materials and motifs from our everyday surroundings. While these works may seem familiar at first glance, they are transformed through the artists’ sensibility and resourcefulness into extraordinary creations we’ve never seen before.

Mysterious portrait photographs printed daily on a copier and intricate collages made by cutting and pasting advertising flyers weave narratives of the deconstruction and renewal of reproduction technologies. Structures composed of countless overlapping chopsticks and three-dimensional objects wrapped in layers of thread reveal the accumulation of the artists’ repetitive actions and the passage of time. Additionally, expressions where figurative and abstract imagery intersect—such as numerous red circles created by bleeding pen ink and bold compositions thickly painted with pastels—allow us to glimpse the artists’ delicate observational gaze as they playfully engage with their materials.

We hope that encountering the works in this exhibition offers an opportunity to rediscover the “known” that often gets buried in daily life, inspiring visitors to view the world around them with fresh eyes.

Finally, we want to extend our sincerest thanks to all the artists who generously lent their valuable works, as well as everyone involved who provided essential support to make this exhibition possible.

September 2025
The Organizers

*Art Brut is a term originally proposed by French artist Jean Dubuffet. Today, it broadly refers to art that is notable for its unique ideas and means of expression, often created by artists who have not received a formal art education.

Encounter with the Known, deeper and beyond the Cycles

KAWAHARA Koya (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery Curator)

In this article, we look back at when the touring exhibition was held at the Shibuya venue, exploring the allure of Art Brut through encounters with unknown forms reconstructed from the known.

Lining the corridor leading to the galleries are the works of Naoto Iguchi, made by continuously printing his face alongside his favorite items using a copier. The works cover the walls, creating a gradation of purple, black, blue, green, and yellow. Working from a base of two-color printing, Iguchi feeds previously printed sheets back into the copier and prints again, producing works with psychedelic color combinations created by the mixing of inks. The spectrum-like surfaces, where boundaries shimmer ambiguously, are said to have emerged through encounters with contemporary artists. The curious sensation that comes from finding familiar objects such as cans, stickers, sugar, and timecards within these amorphous forms where figure and ground fluctuate is difficult to explain. By simultaneously seeing the unfamiliar and the familiar, viewers find themselves drawn to motifs that surface with a strangely vivid presence.

Iguchi folds his printed works, reinforces them with clear tape, punches holes, and threads rubber bands through to create armbands that he wears. Other times, he simply places them on the street and watches them flutter in the

wind. He also ventures outside the welfare facility to engage in impromptu creation using copiers at nearby convenience stores (after purchasing a can of his favorite beer and daily necessities, of course). The forms of his works change, his creative environment shifts, and the events and people he encounters are constantly evolving. Maintaining a certain fluidity, Iguchi enjoys the entire process surrounding the creation of his works. Through these daily interactions, he continues to produce captivating creations.

Upon entering the gallery, works by Eiko Shima, who creates densely packed collages by cutting out and pasting together pieces from advertising flyers, are displayed in chronological order. The four-part Kaleidoscope series, created on the theme of Tokyo where Shima was born and raised, each measuring No. 100 in size, have their canvases almost entirely covered with cutouts of various houses. Standing before the works, one feels simultaneously drawn in and held at a distance, a sensation perhaps akin to gazing at a distant mountain. One is overwhelmed both by the grandeur of something beyond reach and by the dense materiality built up through painstaking handwork. At the same time, the combinations of motifs are wonderfully humorous. Everyday familiar objects meet anew through unexpected pairings, weaving small narratives.

Reflecting on her own work, Shima once remarked that it was as though the artist herself had no blank space to spare, evoking the tangible weight and relentless pace of her daily life consumed by housework and caregiving, all poured directly into her art. This candor ultimately resulted in works that resonate with and captivate many people. In her more recent works, created since relocating, she has begun exploring a different approach, including pieces with open space and works in size No. 10 that can be made at a desk. Shima, who says she would do housework between creative sessions, still leads busy days, but her mind is always on her art. The day we get to see the unfinished work from the Kaleidoscope series, Kaleidoscope No. 1, may not be far off.

Adjacent to these works are the two-dimensional works of Koji Tsurukawa, displayed in a grid. These are created by steadily pressing an oil-based red pen onto paper until the ink bleeds, forming dots. Up close, the edges of these circles appear unevenly rippled, with irregular rhythms emerging from variations in their contours and tonal gradations. The interplay between the blank areas and the red dots evokes an invisible, infinite expanse—like the night sky and its stars. Between the red dots, sounds from daily life such as words spoken by his mother or audio from TV commercials are subtly transformed into peculiar symbols and characters. Clusters of red dots and distorted letters coexist on the same plane, sometimes spaced apart, sometimes overlapping, as if emerging from the same source. One can

discover symbolic signs resembling arrows or crosses derived from distorted versions of the number 4, brand names like Ryukakusan and Vicks Lemon Drops that recall throat lozenges, and fragments of dialogue such as *tatake hen* (I can't hit), *yobi ni kuru wa* (I'll come to get you), and *ashita maregaman* (Endure until tomorrow; Tsurukawa replaces the d-sound with an r-sound). The sounds and voices in his creative environment seem to have resonated within Tsurukawa and been rendered into visual form. Tsurukawa's works unfold as if they were threading between the figurative and the abstract, carrying the sensibility of avant-garde poetry, yet perhaps they are an accumulation of the everyday language that simply spills out, taking visible shape as it gathers.

Further inside, flat works by Takashi Shuji line the walls, thickly layered with pastels. Shuji depicted recognizable objects such as flowerpots, bottles, chairs, and light bulbs as motifs, transforming them into geometric forms. During the creative process, staff would select around four items from everyday objects and studio tools, arrange them on Shuji's desk, and he would then choose which motif to draw and which paper to use. While Shuji primarily used four colors of pastel—blue, black, white, and brown—this exhibition also includes paintings of plants and everyday objects rendered in red, yellow, and green.

His signature half-sized works from the earliest period, including flowerpot paintings and striking black-painted animals, convey a palpable power in their bold outlines and layered application. In contrast, the quarter-

sheet-sized works from 2010 onward seem to exhibit a growing sense of boldness and humor. As a staff member reflected, toward the end Shuji found it increasingly difficult to draw as he wished, and the pressure in his brushwork became more restrained. Yet his distinctive way of cropping and focusing on a portion of the motif, the visual play of reversing figure and ground, and his cheerful color choices all give the impression that he delighted in the viewer's response. Even as the artist himself was changing, the unwavering relationship with his staff surely formed the foundation that sustained Shuji's creative practice.

At the center of Gallery 1 stands Noudama, objects created by Yuka Nouda from discarded thread and fabric scraps that she rolls and winds into compact forms. Their cocoon-like shapes and human-like silhouettes brim with a sense of life, as if they might begin to move at any moment. Each Noudama is formed from small pieces of thread and fabric scraps layered one on top of the other, gradually building outward from the center. This method bears a resemblance to the work of Judith Scott, an artist who similarly wound thread to produce three-dimensional pieces. In Scott's case, she would encase objects from her surroundings such as wheels, chairs, and hangers, and her works are said to have a structure of protecting or concealing what is contained within. The dense, interwoven threads in Scott's pieces evoke cocoons or spiderwebs, carrying a talismanic or fetishistic weight. Nouda's works differ in that the emphasis falls more on the surface colors, patterns, and overall

form rather than on the enclosed objects or the act of enclosing. Additionally, her works are characterized by round eyes and slyly grinning mouths that lend them an endearing expressiveness. One senses in them the personality of the artist herself, who is said to love making people laugh. She has recently scaled back textile work due to eye strain, but given her strong motivation for creating, she continues to produce new works alongside her studio peers.

In the adjacent Gallery 2, Hiraku Takeda's sculptural works, composed of countless disposable chopsticks, await visitors in quiet composure. The weightiness of the forms contrasts unexpectedly with the humble material—chopsticks once used in ramen shops, soba restaurants, and occasionally traditional Japanese restaurants. Through the accumulation of small, repetitive actions, these overlooked objects are transformed into something radiant and enduring. Upon closer inspection, subtle differences in the chopsticks' breaks and bite marks become apparent. This repetitive act of inserting chopsticks differs from traditional sculpting techniques, more closely resembling the motions of ikebana flower arranging or rice planting. Though each insertion may not be sturdy on its own, the collective act creates a binding strength.

Takeda's works emerged unexpectedly from within the welfare facility, and as opportunities for exhibition arose, the need for storage and transport crates, as well as handling instructions and documentation, naturally followed. It should be noted here that this exhibition was made possible only through

the dedicated efforts of people captivated by Takeda's works, who sought to preserve them through exhibition and storage.

Having looked back at each artist's distinctive expression, all rooted in bricolage, some readers may find that their view of the familiar, known things around them has changed. I myself was struck by a sensation of my own fixed perceptions being shaken, by the latent possibilities of the known, and by the surprising forms that lie beyond. Many works of Art Brut arise from necessity and improvisation, because the objects, environments, and circumstances surrounding the creator are fully mobilized in the work. It is for this reason that the works, or the materials used in them, quietly begin to speak of the artist's richly textured life.

Furthermore, recent trends in Japanese Art Brut tend to highlight not only the autonomy of individual creators and their works but also the significance of the creative process and communal relationships. In this exhibition, the works of Iguchi and Takeda are built on communication and trust with facility staff, while Shima and Nouda have persevered in their creative practice, working in their own rooms at the end of the day in their private time. Shuji and Tsurukawa benefitted from the presence of dedicated companions at the studios run by their care facilities. In this manner, it is not the materials alone but the interplay of creative acts, environments, and relationships with the people around them that gives rise to these singular works. From this perspective, one can appreciate the allure of Art Brut as a force that challenges the

boundaries of the individual. It is our hope that the known will continue to circulate without becoming fixed, and that new encounters will keep on unfolding.

List of Works

Title	Date	Material / Technique	Dimensions (height/ width/depth, in cm)	Collection
IGUCHI Naoto				
Untitled	2005-2023	Photo	Dimensions variable	SFRN
SHIMA Eiko				
Kaleidoscope No.2	2003	Flyer, glue on canvas	162×130	Collection of the artist
Kaleidoscope No.3	2003	Flyer, glue on canvas	162×130	Collection of the artist
Kaleidoscope No.4	2004	Flyer, glue on canvas	162×130	Collection of the artist
Kaleidoscope No.5	2004	Flyer, glue on canvas	162×130	Collection of the artist
Sun	2022	Flyer, glue on canvas	162×130	Collection of the artist
Tower block	2023	Flyer, glue on canvas	100×80	Collection of the artist
On the way	2023	Flyer, glue on canvas	100×80	Collection of the artist
Scrap and Build	2024	Flyer, glue on canvas	53×45	Collection of the artist
Butoh Dance	2024	Flyer, glue on canvas	53×45	Collection of the artist
La Vie En Rose	2024	Flyer, glue on canvas	53×45	Collection of the artist
Air Pollution	2025	Flyer, glue on canvas	53×45	Collection of the artist
SHUJI Takashi				
Flower in a flowerpot "KU"	2000	Pastel on yellow cardboard	74×55	Suzukake Art Club
Flower in a flowerpot "KO"	1999	Pastel on watercolor paper	55×78	Suzukake Art Club
Flower in a flowerpot "SE"	2001	Pastel on watercolor paper	78×56	Suzukake Art Club
Planted flowers and plants	unknown	Pastel on yellow cardboard	54×77	Suzukake Art Club
Hanger	2007.7.12	Pastel on watercolor paper	54×79	Suzukake Art Club
Stepladder and tripod	2007	Pastel on watercolor paper	79×54	Suzukake Art Club
Sewing machine	2006.8.7	Pastel on yellow cardboard	54×74	Suzukake Art Club
Flowerpot	2008.4.10	Pastel on yellow cardboard	77×54	Suzukake Art Club
Giraffe 3	2009.2	Pastel on watercolor paper	54×79	Suzukake Art Club

Cow	2009.12.13	Pastel on yellow cardboard	54×77	Suzukake Art Club
Camera tripod	2015.3.14	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Chair	2015.4.28	Pastel on yellow cardboard	54×38	Suzukake Art Club
Perfume bottle	2015.8.28	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Light bulb	2016.1.26	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Mouse 2	2007.12.20	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Chair	2012.9.11	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Hand carder	2013.4.19	Pastel on yellow cardboard	54×38	Suzukake Art Club
Aloe	2015.2.13	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Fuel oil pump	2015.5.22	Pastel on yellow cardboard	54×38	Suzukake Art Club
2 glass bottles	2015.9.8	Pastel on watercolor paper	54×39	Suzukake Art Club
Horse	2017.2.21	Pastel on yellow cardboard	54×38	Suzukake Art Club
Bottle, plant and mango	2013.3.29	Pastel on yellow cardboard	53×38	Suzukake Art Club

TAKEDA Hiraku

Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on cardboard	51×37×45	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on basket	91×62×60	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks	90×58×91	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on basket	63×63×65	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on basket	159×100×170	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on bucket	230×80×100	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on pot	40×40×50	Collection of the artist
Chopsticks	2010	Disposable wooden chopsticks on basket	59×55×55	Collection of the artist

Untitled	circa 2013-2019	Aqueous marker, ball point pen, felt-tip pen on paper	39×54	Studio Pocchi
Untitled	circa 2013-2019	Aqueous marker, ball point pen, felt-tip pen on paper	39×54	Studio Pocchi
Untitled	circa 2013-2019	Pen, tape, paper	Dimensions variable	Studio Pocchi

NOUDA Yuka

Noudama	2011	Yarn	11×58×9	Kobo-Syu
Noudama	2012	Yarn	17×41×9	Kobo-Syu
Noudama	2014	Yarn	17×50×50	Kobo-Syu
Noudama	2017	Yarn	58×33×21	Kobo-Syu
Noudama	2016	Yarn	20×55×59	Kobo-Syu
Noudama	2017	Yarn	48×33×31	Kobo-Syu
Noudama	2013	Yarn	45×30×30	Kobo-Syu
Noudama	2015	Yarn	24×101×31	Kobo-Syu
Noudama	2020	Yarn	56×77×23	Kobo-Syu
Noudama	2018	Yarn	55×64×58	Kobo-Syu

[写真撮影]

佐藤基

(14-17、19、22-25、27、30-31、34-35、38-42、
46-51、54-59、62-65、67-71頁)

赤羽佑樹

(21、26、37、43、45、50頁)

[提供]

さふらん生活園

(13、18頁)

社会福祉法人一羊会 すずかけ絵画クラブ
(29、32-33頁)

社会福祉法人みぬま福祉会 工房集
(53頁)

記載のない画像は、

東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

[Photographer]

SATO Motoi

(pp.14-17,19,22-25,27,30-31,34-35,38-42,
46-51,54-59,62-65,67-71)

AKABA Yuki

(pp.21,26,37,43,45,50)

[Courtesy]

SFRN

(pp.13,18)

Suzukake Art Club

(pp.29,32-33)

Kobo-Syu

(p.53)

All images without credit are taken
by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

アール・ブリュット2025巡回展

既知との遭遇

自伝的ブリコラージュの世界へようこそ！

Art Brut 2025 Touring Exhibition

Encounter with the Known, welcome to the world of autobiographical bricolage!

[展覧会]

企画・担当：河原功也(東京都渋谷公園通りギャラリー)

学芸補佐・制作：坂井若葉

補助：秋間敬代、伊藤雅子、八巻香澄(東京都渋谷公園通りギャラリー)

アクセシビリティプログラム：小野佳奈、竹野如花(東京都渋谷公園通りギャラリー)

広報：加藤志保、勝山晴香(東京都渋谷公園通りギャラリー)

会場構成：tamari architects

デザイン：homesickdesign

広報物印刷：株式会社サンエムカラー

[カタログ]

企画・編集：河原功也

執筆：河原功也

翻訳：株式会社アイデア・インスティテュート

デザイン：homesickdesign

印刷：関東図書株式会社

発行：東京都、東京都渋谷公園通りギャラリー(公益財団法人東京都歴史文化財団東京都現代美術館)

発行日：2026年3月

[Exhibition]

Curator : KAWAHARA Koya

Assistant : SAKAI Wakaba

Support : AKIMA Takayo, ITO Masako, YAMAKI Kasumi (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Accessibility Program : ONO Kana, TAKENO Yukika (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Press Officer : KATO Shiho, KATSUYAMA Haruka (Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

Exhibition Space Design : tamari architects

Design : homesickdesign

Publication Printing : SunM Color Co., Ltd.

[Catalogue]

Planning, Editing : KAWAHARA Koya

Texts : KAWAHARA Koya

Translation : IDEA INSTITUTE INC.

Design : homesickdesin

Printed by : Kanto Tosho Co., Ltd

Published by : Tokyo Metropolitan Government

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Publication Date : March 2026

